学修成果の可視化①
学生プロファイルによる学修成果の測定が始まる

大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター　市村　光之

高大接続・全学教育推進センターでは、H29 年度秋学期より YNU 学生ポートフォリオに《学生プロファイル》を導入しました。学生にとっては主体的な学びをデザインするツールであり、大学にとっては学生の学修行動や成果を分析し、教育改善に結びつけるツールです。今回は学生プロファイルの概要と、分析結果の一部を紹介させていただきます。

学生プロファイルの仕組みは

学生プロファイルは、学生が自身の学修・生活行動や学修成果を記録するものです。毎学期、履修登録の段階で学生プロファイルの入力を済ませてから、履修登録画面に進むステップにしています。これにより悉皆調査が可能になりました。

春学期の履修登録時の入力項目：

- 高校時代の学修・生活行動（新入生のみ）
- 学士力自己チェック（2 年生以上）
- 前年度の留学等の授業外活動（2 年生以上）

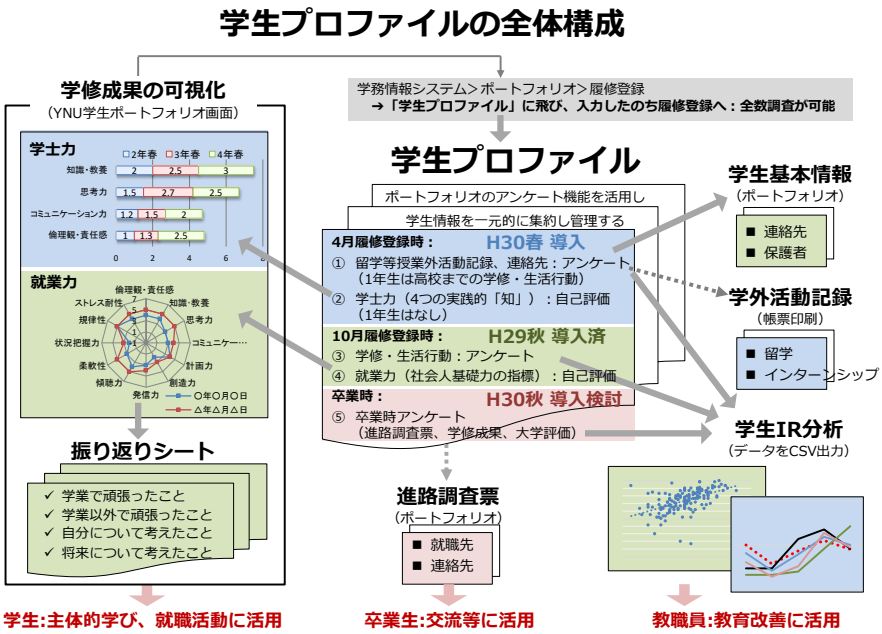
秋学期の履修登録時の入力項目：

- 前学期の学修・生活行動や意識（全学年）
- 就業力自己チェック（全学年）

学生は自分の学士力や就業力などをグラフに可視化して確認できます。それら学修成果を踏まえ「振り返りシート」に前学期の記録をまとめ、新学期の履修科目や学生生活を構想する仕組みです。

毎学期、履修登録の段階で学生プロファイルの入力を済ませないと履修登録画面に進めません。このような形で学生に入力を強制することが妥当なのか、学生は主体的に学べるようになるのか、と疑問を感じる方もいらっしゃるかと思います。 導入担当者として筆者にも不安がないわけではありませんが、「就活の時期になって初めて、定期的にポートフォリオに記録しておけばよかった」と後悔する学生の声も耳にします。学生が大学で学ぶ目的や方向性を考えるきっかけとして半年毎に振り返りを促すのも、学生が主体的な学びの姿勢を獲得する一助になると判断し導入に踏み切りました。導入したからには、入力しないと履修登録ができないから入力する、ではなく、役に立つから入力すると学生が自発的に利用するよう、今後もよりよい仕組みにしていきます。

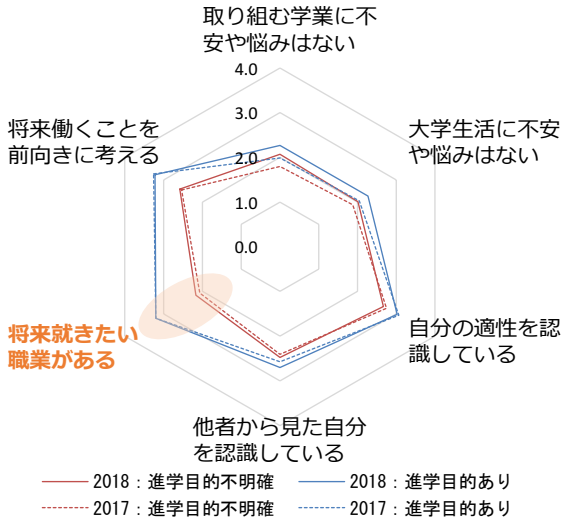
いずれにしても、この方式により学修成果等を定期的に悉皆調査できるようになりました。学生に入力の負担を強いる分、主管する高大センター側も学生 IR データとして迅速に集計・分析し、各部局が教育改善に活かせるよう情報展開していく所存です。



学業と将来の係りの意識付けが主体的な学びにつながる

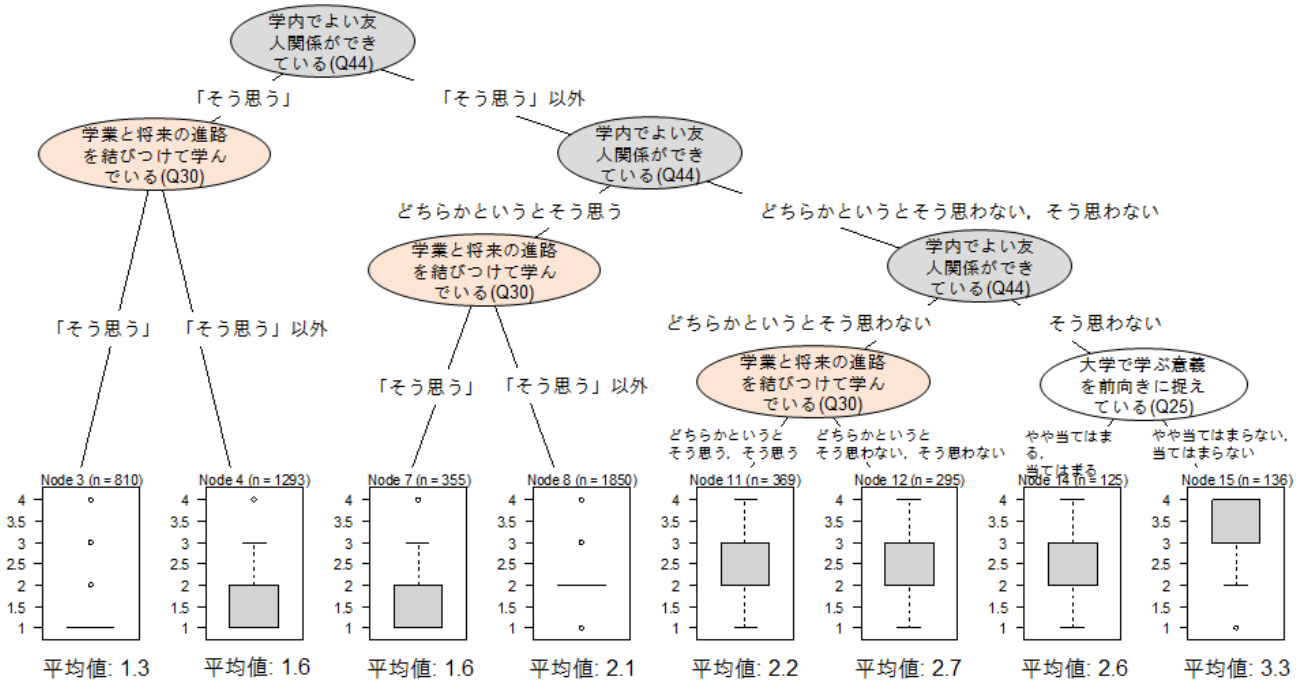
右図はH29、30年度新入生の意識調査で、横浜国大に進学した目的が明確にある人とない人に分けて、入学時の意識を 4 件法で集計したものの平均値です。6 項目のうち多くは僅差ですが、「⑤将来向かいたい進路、就きたい職業がある」で差が目立ちます。新入生たちは、大学で学ぶ目的と将来の進路をつなげて考えていると推測できます。この傾向は同調査を開始した 5 年前から変わりません。そこで、将来の進路との関連で学業の意義を認識できれば、学生たちは主体的な学びを実現できるのではないかとの仮説に基づきキャリア教育科目を再体系化し、H29 年度より開始された YNU リテラシー教育の共通テキストに反映してきました。

学生プロファイルの導入に伴い、学生の学修・生活行動や意識を継続的に測定できるようになりました。下図は、H29 年秋学期に実施した上級生（2〜4 年）の調査結果を「大学生活の充実度」を基準変数に決定木分析したものです[1]。第一に、「学内でよい友人関係ができている」ことが大学生活の充実に寄与しています。学生たちにとって人間関係が何より大切であることがわかりますが、これは社会に出てからの仕事の充実度



でも、取り組む業務そのものの遣り甲斐と共に、重要な要素でしょう。

注目すべきは第二のファクターで、「学業と将来の進路を結びつけて学んでいる」ことが挙がりました。つまり、学生たちは将来との係わりの中で自分が大学で学ぶ意義を見出し、そうした意義から目的意識をもち専攻する学業に取り組むことで充実を感じているのです。新入生の調査で乖離が見られた将来との係わりの部分をいかに繋ぐか、がやはり重要であることが、今回確認できたことになります。



注）平均値の値が小さいほど，充実度は高い

新入生の調査では横浜国大の志望度と、本学に入学することを前向きに捉えているかどうかも訊いています。H30 年度では、前期入試組うち 273 名（前期の 29.2%）は第一希望ではなく、前期・第一希望であるにも拘らず 114 名（17.2%）が前向きになれないまま入学式を迎えています。後期入試組は第一希望でない学生が大半ですが、前向きになれない学生は 72 名（後期の 14.9%）と前期組よりは少ない割合です。

前期組で前向きになれない学生の主な理由は、学業についていけるか不安：21.4%、居場所（友人、部活等）が作れるか不安：20.6%、大学で特にしたいことがない：16.8%など。大学という新しい環境への適応不安と、大学合格がゴールで次の目標が見いだせないことにあるようです。

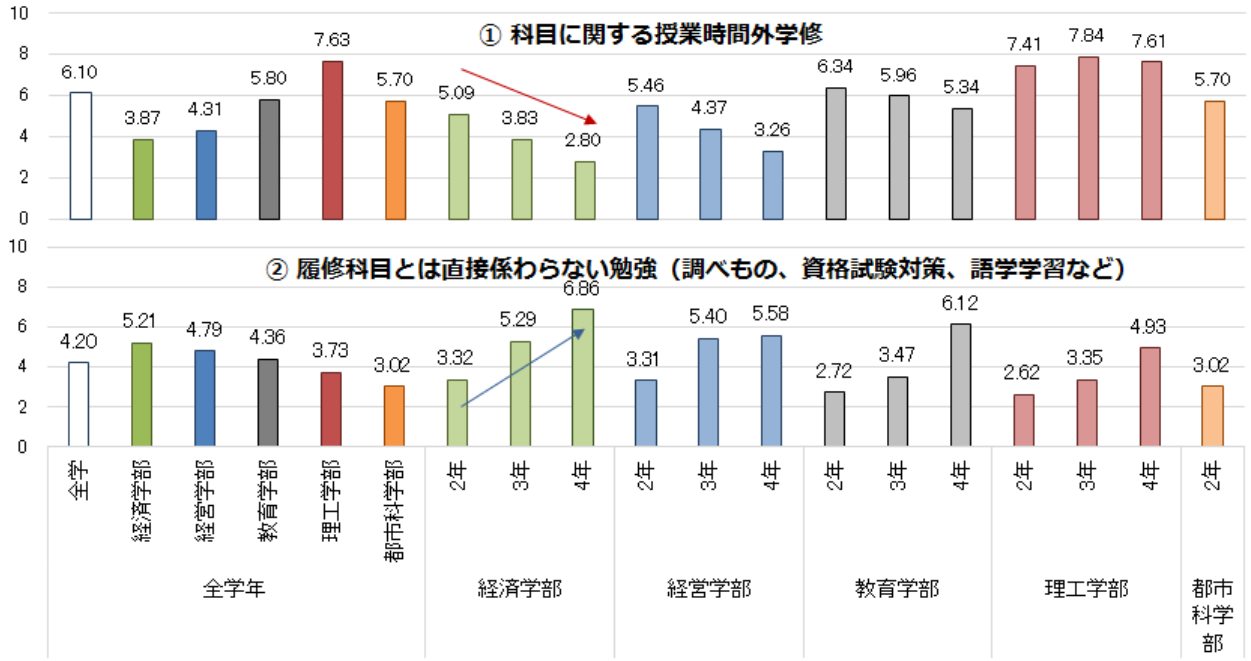
後期組で前向きになれない学生の主な理由は、第一希望に入れなかった悔しさ：35.0%、来年、再受験しようかと思案している：15.0%、自分の将来にどう結びつくか不安：12.0%です。不本意ながら入学した現状をまず受け止め、早期に新たな目標を設定することが課題です。その解決の糸口の少なくとも一つは、学業と将来との係わりを自覚させ、これから始まる大学生活の意義をいかに見出させるかにありそうです。

これら前向きになれない新入生に主体的な学びの姿勢を身に着けさせるためにも、1 年次春学期という入り口の段階で、履修登録をはじめ大学というシステムや新しい人間関係に適応させ、それぞれの専攻で学ぶことと将来の係りを意識させることが大切です。初年次教育が目指すところは、各大学の実情によりさまざまかもしれませんが、本学が目指す初年次教育はここにあります。これは YNU リテラシー教育やキャリア教育に留まらず、各教員がそれぞれの立場で、全学的に取り組む課題と言えるのではないでしょうか。

学修時間から見えること：授業外学修と科目以外の自主勉強

学生たちは日々の時間を何にどのくらい費やしているのでしょう。学生プロファイルでは、学生の学修・生活時間の実態を把握する試みとして、週当たりの学修やサークル活動、アルバイト、通学などの時間を学生に書かせています。「試み」と書いたのは、前学期を振り返って平均的な週当たり時間を記入させているので、かなり感覚的な数字でしかなく、どこまで実態を正確に反映しているかはわからないからです。そうした制約があるデータであることを前提にしつつ、見えてきたいくつかの特徴について説明します。

下図は、①授業外学修時間と、②科目とは直接係わらない勉強の週当たり時間の平均です。両グラフの左側が学部別の平均、中央から右が学部・学年ごとの平均です。このデータは H29 年秋学期を振り返った際の数字ですので、「4 年」は 3 年時の秋学期、「3 年」は 2 年時の秋学期と読み替えてください。



①授業外学修時間の学部別（左側）を見ると、経済・経営・教育学部よりも理工学部の学修時間が多いです[2]。学部・学年ごとを見ると、理工は学年が上がっても学修時間はほぼ同じですが、文系学部では学年が上がるごとに学修時間は減る傾向にあります。理工系は学年が上がっても必修科目等で時間割が埋まっていますが、文系は学年が上がるにつれ履修科目が減る傾向にありますので、授業科目に係る学修時間も履修科目数に比例しています。文系は理系に比べ勉強しない、と一般に言われる所以です。一方、②科目とは直接係わらない自主勉強時間では、①の傾向は逆転し、学部別では理系よりも文系学部が多くなります。学年別では、文系学部も学年進行とともに自主勉強時間が増えます。

この①②の時間を合算したのが下表です。学部ごと、学年ごとの差、共に1～2時間と意外に小さく、週当たりの勉強時間は学部、学年に拘わらず10時間前後になることが分かります。つまり、世間で言われているように、文系は理系に比べ勉強しないというイメージは、少なくとも横浜国大の学生に関しては該当しません。学修時間が多ければよいと単純には言えませんが、海外に比べ日本の大学生は勉強しないと一般論として認識されている中、この10時間前後が大学生に相応しい学修時間なのかどうかは、今後の分析課題です。

授業外学修＋授業と係わらない勉強時間

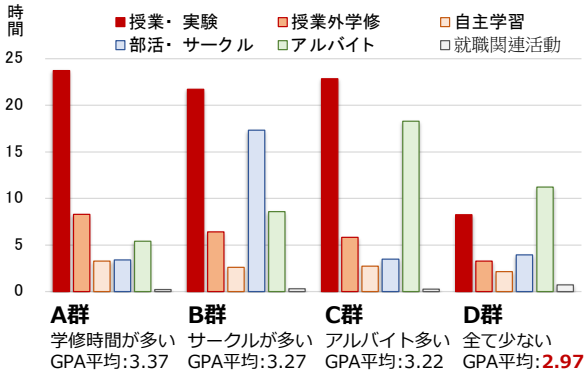
	経済	経営	教育	理工
2年	8.41	8.77	9.06	10.03
3年	9.12	9.72	9.43	11.19
4年	9.66	8.84	11.46	12.54

4年（3年秋学期）のみ文系と理系学部の差が大きくなっています。3年の秋学期は就職活動の準備期間に当たり、文系学部の学生は就活に時間を振り向けているためです。実際、3年時秋学期の就活関連の週当たり時間は、経済・経営学部が8.5時間、教育が5.5時間、理工が2.2時間でした。約半数が教員採用試験を目指す教育学部、大学院進学希望者が大半の理工学部との事情の違いが表れています。理工の学部平均は2.2時間ですが、理工で就職する学生は2割ほどですので、そこから推測すると就職希望の学生は文系同様8時間くらい活動していると推測できます。このように文系・理系に拘わらず就活に係る負担が大きい現状も、今回の調査で初めて数値化できました。

時間の使いかたから見えること：4タイプの学生たち

学生の生活時間についてクラスター分析したところ、1～3年生は授業や授業外学修、自主学習など学業に多くの時間を費やしているA群、学業とサークルなど課外活動に熱心なB群、学業とアルバイトに熱心なC群、いずれも不活発なD群の4タイプに分かれることがわかりました[3]。2年生のデータを下図に示します。

クラスター分析（2年時春学期）



学業を全うすることが前提ですが、学生生活において何に重きを置くかは、学生それぞれの判断に委ねられます。A～C群の学生たちは学業に費やす時間がほぼ同じです。その中でB、C群は、学業に加え重点的に取り組む活動があって、それらをうまく両立させているように見受けられます。A群は学業オンリーなのが少し気になります。高校時代はいわゆる「帰宅部」タイプ、真面目に大学に通っていますが目的意識が希薄な学生たちなのでしょうか。さらに、D群の学生（学年の約2割）は授業時間から推察すると大学にあまり登校しておらず、生活実態が不明です。GPAの平均値も他の3群に比べ明らかに差があります。こうした学生を早期に把握し、事情を勘案しつつ個別にサポートすることが必要でしょう。

学生プロファイルの導入に伴い、学修成果の測定に留まらず、こうした情報提供をタイムリーにできる仕組みも今後、整えていきたいと考えています。

注1、3：決定木分析とクラスター分析は、教育学部・鈴木雅之准教授の協力による。

注2：H29年（現2年生の入学時）の学部新設・改組により、教育人間科学部は教育学部に改組、理工学部および教育人間科学部の一部を再編し都市科学部が新設された。なお、本稿では旧学部も新学部名で表記している。